

[学術資料]

『サントスのご作業』における聖フランシスコ伝
—現代語訳②—

St. Francisco's Biography as It Appears in *Santos no Gosagyō*
— Part Two of a Modern Translation—

土屋 有里子
Yuriko Tsuchiya

はじめに

前号に引き続き、『サントスのご作業』における聖フランシスコ伝、後半部の現代語訳を行う。小鳥への説法、イエス・キリストの聖痕拝受から死へと、フランシスコ伝の中でも著名なエピソードが続き、物語は佳境を迎える。最終部分は日本独自の解釈を持った独自文となっており、その点を含めての考察は後稿に期したい。

〈現代語訳〉¹

②⑥この聖人は、神を愛するようと、神の創造物すべてに勧められたので、すべてがそれに従ったのである。聖人は鳥にも説教をなされたので、鳥がやってきて説教を聞き、衣服で追い払っても飛んでいかなかった。

②⑦またある時は、蟬が部屋の近くにいるので、「兄弟である蟬よ、ここにいらっしやい」とおっしゃると、蟬は聖人の御手にやって来た。「神を讃えなさい」とおっしゃると、蟬は鳴き、聖人のお許しがあるまでは、飛びたとうとしなかった。

②⑧また、キリストが自分は石だとおっしゃったことを心得て、聖人は心中に恐れを抱いて石をお踏みになった。太陽や月、星を見ては、とても喜ばれて、「神を讃えなさい」と教え諭された。

②⑨ある時、聖人は修道士に、「私を軽蔑し、愚か者と罵りなさい」と強く命令された。修道士は嫌々ながら命令通りにしたところ、聖人はとても喜び、「あなたは正直者です。神から大切に扱われるでしょう。私はそのように言われ続けたいのです」とおっしゃった。主導者になるよりも、主導者の下で従うことを重要なことだと思われ

¹ 現代語訳における段落番号は、後の考察のために私に付したものであり、前号からの通し番号となっている。なお、本稿は、JSPS 科研費 (15K12851) の成果の一部である。

て、「私は修道会の総長役を辞しましょう。私がお仕えする一人をあなた方の中からお決めなさい」とおっしゃった。また道に行く時は、お伴の人に従うと決めて、いつもそのようになさった。ある人がその決まりを破ると、他の人への見せしめのために、その人の衣装を剥ぎ火に投げ入れたが、しばらく焼けることもなく、また取り出させて、その人に与えなさいとおっしゃった。衣装を受け取って見ると、全く焼けていなかった。

⑩ある時、道で、池の周辺に鳥が集まってさえずっていた、聖人はそれを見て、引き連れている人々に、「私たちの兄弟である鳥たちもさえずって、神を讃えている。さあ私たちも仲間に入って、お祈りしましょう」とおっしゃり中に入ったけれども、鳥たちは飛び去らず、さえずったままであったので、祈りの妨げとなった。そこで聖人が、「兄弟である鳥たちよ、おまえたちはもうずっと神を讃えているではないか。私たちも神にお祈りを捧げたいのだ。祈りが終わるまで黙っていておくれ」とおっしゃると、祈りの間は鳴かず、祈りが終わってから鳴けとおっしゃると、聖人のお言葉通りにしたのであった。

⑪ある騎士が、聖人に食事をごちそうしようと、家に招待した。すると聖人は騎士に向かって、「わが兄弟よ、私の忠告に従って、まずあなたの罪の告白をなさい。なぜなら、しばらくすると、あなたはここではなく、他の場所で食事をするようになるからです」とおっしゃったので、懺悔を行った。彼は聖人と共に食事を終えて、亡くなったということだ。

⑫ある時、道にたくさんの鳥が並んでいた。聖人は習慣通りに、人にするように礼節をとり、「兄弟たちよ、あなたたちは羽毛を衣装とし、翼を足とし、大いなる風を道とし、求めなくても養って頂けるといふ、神からの大きなお恵みを受けているのですよ」とおっしゃった。すると鳥たちはことごとく首をさしのべ、翼を垂れ、くちばしを開け、御礼を申し上げる様子を見せた。

⑬ある時、聖人が説教をなさっている時、ツバメがうるさく鳴いていたので、聖人は、「兄弟たちよ、あなたたちはもう長いことさえずったのだから、しばらく静まりなさい。私は父なる神の御事を説教しているのです。その間は鳴かないように」とおっしゃると、ツバメは静まったということである。

⑭ある時、道で銀貨の入っている袋を見つけなかり、お伴の修道士が、貧しい人に与えようとその袋を取ろうとした。聖人はとどめたけれど、修道士がしきりに取ろうと言うので、お祈りをすると、袋はたちまち蛇になった。その時聖人は、「修道士にとって、金銀は悪魔か毒蛇のようなものである」とおっしゃった。

㊤この聖人の節制は、他に類をみないほど厳しいものであった。なぜなら、修道会を始めたころ、人々の門口に立って物をもらい、食べておられたので、人から満足する量をもらえないことが多かった。修道士たちとともに何度も、大いなる喜びをもって草ばかりを食べておられたからである。健康な時は、常に調理した物は食わず、パンと水だけをとっておられて、たまに調理したものを食べるといえば、草だけであった。その草もうまみを覚えないように、灰を添えて、時には冷水とともに食べておられたので、ただの草よりもまずいものであった。水も心底喉が渇かなければ飲まず、常に渇きを覚えておられた。飯台はなく、直接土の上に置いて食べておられた。一年中、ほぼ断食をしておられた、主イエス・キリストの復活までの四旬節は、水とパンを食べてお勤めされた。次に、聖霊に対しては、使徒をお手本として、断食をなさった。また使徒聖ペテロと聖パウロに対しても断食をなさった。それから聖母マリアの被昇天まで聖母マリアに対して断食をなさり、大天使ミカエルに対しても、被昇天からその祝日まで断食をなさり、キリストの降誕祭の前にも断食をなさったということである。門派の人々に対しても、各の聖人の日から降誕祭までは断食をするようにとのご命令であった。ご寝所も土の上と決めておられ、枕は石か木のはし切れであった。そうしてよく、土の上に座り、一晩中お祈りなさっていることも珍しくなかった。聖人が常におっしゃるには、「聖ラウレンティウス及び天にいらっしゃる司祭である聖人と、この現実世界の能力のない司祭の両方にお会いすることがあったら、天国の聖人をさしおいて、現実の司祭の手に口づけるべきである」と。そのわけは、司祭の御手は神の御身に直接接触れ、また人の力の及ばないことを取り扱う手（聖体の秘蹟を行う手）だからである、ということだ。

こうして、フランシスコが存命の間におこした奇跡と、治癒された病人のことを書けば、それは説明できないほど多いので、今はここに書かない。よく知りたいと思ったら、その年代記を見てほしい。

㊦フランシスコの死について述べる前に、ご臨終より二年前に御覧になった幻視と、五つの御傷を受けられた様子を述べるべきであろう。この聖フランシスコは、善を行うことを全くやめず、むしろヤコブの梯子の、地から天にかかった橋を行き来した天使のように、観想しては天にのぼり、また慈悲の思いから隣人に説教するためには天から降りていらっしゃった。つまり、功德を行う力を得るために、自分に与えられた時間を賢明に使い分けていらっしゃったのである。隣人のためにも時間を決めて説教なさったということだ。

㊧神の御事をより深く思案したいと思われる時は、人のいない所に行き、観念な

さった。それ故臨終の二年前に、まず大変な労苦をこらえて、アルヴェルナ山に上り、聖ミカエルを称えて、いつものように断食を始められた。すると常よりも天の観想の豊かさをその身に感じ、天への憧れの炎にこがれて、天の甘く幸せな恵みを味わわれたのであった。すると心の中に、神からのお告げがあり、福音書を開き、いっそう神のご意志にかなうことを見つけるべきであると知らされた。少しお祈りなされた後、祭壇の上にある福音書を取り、神に聖なる者とされた仲間にお渡しになり、至聖なる三位一体の名のもとに、三回それを開きなさいとおっしゃられたので、ご命令のとおりになると、三回ともキリストのご受難の場面に当たった。このことによって、神のしもべである聖フランシスコが、イエス・キリストのご行跡を学ぶように、そのご受難の苦痛をもその身に受けるべきだと悟らせたのである。その時までは、その身に主の十字架を担ぐと、体も弱ってしまったのだが、心は少しも弱ることなく、かえって強い心をもって、どんな苦しみ、殉教であろうと堪えてみせるとご自身のすべてを捧げられたのである。大いなるイエス・キリストへの愛の心は炎のように燃え立ち、その愛の力はかぎりなく強いものであるので、どんな苦勞の水もその炎を消し去ることは出来ないのである。

㊸そうしてこの聖人はセラフィム（熾天使）のような燃え立つ愛と天への憧れの深さによって、神のもとへと高く上げられていき、私たちのために十字架にかかりなされたイエス・キリストへ、甘き愛をもって変容なされたのである。聖ミカエルの祝日が近づいたある早朝、例のアルヴェルナ山でお祈りなされていたところ、翼を六つ持ち、太陽のように光り輝きながら天から降りてくるセラフィムをご覧になった。そして聖人はセラフィムに近づかれたのである。

㊹セラフィムはその翼の間に、手足を十字架の形に伸ばし、二つの翼を頭の上に広げ、他の二つで体を隠し、もう二つは飛翔するために広げていた。神に愛でられたフランシスコはこれをご覧になり、少し驚いて、心の中では半分喜び、半分悲しく思われた。セラフィムを通して、我らの救い主であるイエス・キリストが慈愛の目で見つめて下さるのは喜びである。一方で、十字架にかかられたお姿を拝見するのは悲しかった。不死であるセラフィムを通して、受難のお姿を見ることに、聖人は違和感を覚え、不思議に思ったのである。イエス・キリストがこの聖人の目前に現れなされたことにより、聖人ご自身が（肉体的に）十字架にかかれることはなく、ただ貴き神の愛をもって靈魂を燃え立たせて、十字架にかかりなされたイエス・キリストに同調するようにとのお告げであったのである。

㊺さてこの幻視が終わると、聖人の心中には、不思議な愛の炎が燃え立ち、お体に

も、キリストの聖痕が残られたのである。幻視の際に十字架にかかられたキリストのお姿を拝見したように、すぐに自らの手足にも聖痕が出現したのである。両方の手のひらには釘の頭が黒く見え、手の甲には釘の先を打ち返したように、皮一枚の下に細長く曲がって、盛り上がって見えた。足の甲にも釘の頭があり、足の裏には釘の先が高く現れ、自由に踏み込むことが出来ないほどであった。足の裏と、打ち返したように見えている釘の先との隙間は、指一本入るほどだったという。同じように右の脇腹にも槍の傷跡が現れて、周囲は赤くなり、常に血が流れ出ていたという。そのため、聖人の肌着は常に血に染まっていたという。

④そこで、聖人は神に与えられた大いなる恩恵を隠し通すことも出来ず、また主の秘密をみだりに公言することも憚られたので、ある時、とても親しい人々との会話のついでに、もし人の上にこのような神の恩恵を受けることがあったとしたら、それを公言すべきか否か、と問われた。するとその中の一人で、神の輝かしい魂を宿した者が、聖人に申し上げた。「師父よ、神の秘密は時として、あなたのためではなく、ただ他の人のために顕れるのだと心得なさい。多くの人々の徳のために、受けた恩恵を隠し通されては、今後お咎めを受けることになるでしょう」と。聖人はこれをお聞きになって、通常は、「私のこの胸一つに秘めておこう」とばかりおっしゃる人だけでも、あまりの畏れ多さに動かされて、幻視を語り、今回、自分が礼拝した方が語られたことの詳細については、生きている限り口外しないとおっしゃられた。

④それから四十日過ぎて、聖ミカエルの祝日に、その山より下りられた。この聖人は、十字架にかかられたイエス・キリストの聖痕を、石や木に人の手によって造られたものではなく、神の御手によりその肉体に造り写されて帰ってこられたのである。聖書に、主の秘密は隠すのがよいとあるように、主の秘密をご存じであるこの聖人は力の及ぶかぎり、イエス・キリストの聖痕を隠しなされた。しかし、神のみ業は人々に与える恩恵を啓示なさるものなので、その聖痕のすばらしい善徳を人々に知らせるために、様々な奇跡を顕されたのである。

④ナポリのロゲリウスという修道士は、聖人の像の前でお祈りしているうちに、本当にこの聖人はイエス・キリストの聖痕をその身に受けたのかどうか、と疑いの心を起こしたところ、弓を放つ音がして、その手に激痛を感じた。見てみると、手をおおっている手袋は少しも破れていないのに、手袋をとってみると、矢傷を受けていた。その傷はひどく熱く痛み、死ぬほどになって、聖人に対して疑いを持ったことを後悔して、聖人の受けられた聖痕は真の聖痕であると信じたところ、傷は治つ

たということだ。教皇ハドリアヌス四世、また教皇ニコラウス三世は、聖フランシスコにも聖痕があることを、大勅書をもって証拠となさったのである。

④この聖人は修道士となってから十八年目に、アッシジにおいて病気になり、その場にいる兄弟であるすべての修道士を召して、一人ずつの上に手をおかれ、祝福を唱えられ、死が近いとの自覚から、二人の修道士を呼んで、「私は今死のうとしてゐる。だから、神に深い感謝を申し上げ、歌いなさい」とおっしゃった。ヨハネによる福音書の「過越祭の前のことであつた」と始まる部分を読ませて、ご自身もできる限り、「私は大声で神に呼ばわり」という詩編を唱えておられた。土の上に苦行用の毛のシャツを置き、その上に灰をまき、その上に横たわり、死の際にも、いつもの行いのおり、すべての者に神を賛美するよう勧めなされた。そうして、「私の兄弟である死よ、よく来てくれた」とおっしゃるとともに、息を引き取られた。

⑤ある善人である修道士が、大きさは月のようで、太陽のように光り輝き、星のような形をした聖人の靈魂が、天に上られるのを見たということだ。また別の修道士が、しばらく病気だったのだが、聖人が亡くなられた時、大声で、「師父よ、私も今すぐ参ります。お待ち下さい」と叫んだのを、仲間の修道士たちが、「何を言っているのだ」と聞いた。すると、「私たちの師父である聖フランシスコが、たった今天に上られたのを見なかったのか」と言って、そのまま息を引き取ったということだ。聖フランシスコは幼少時に学問し、修道士となった後は説教を始められた教会で、永遠の眠りにつかれたのである。

⑥イエス・キリストのお言葉はこの聖人を通して顕されたのである。それはなぜかと言うと、キリストのお言葉に、「私のために家一つを捨てた者は、その一つを百にして与えよう」というものがある。この言葉が、聖人の上に余すところなく顕れたのである。福音書の訓戒を信じてわずかな家を捨てたために、今に続く数多の大聖堂があらゆる場所に、この聖人のために建立された。また少しの所領を捨てたために、神の力によって、あちらこちらの所領が教会に寄進された。またこの聖人は他の人よりもへりくだっている方だったので、他の人より現世、来世において尊崇されるのである。それは、この世界においても、どの権力者たちよりも名誉があることなのだ。マケドニア王アレクサンドロス大王や、初代ローマ皇帝アウグストゥスの名誉も聖人には及ばないのである。

⑦これについては譬え話がある。街道沿いにある宿屋の主人に、「ここにはどんな騎士や貴族たちが通るのか」と聞くと、「そのような人は毎日数え切れないほどいます

し、誰とも判別できません。しかしここを通った貧しい騎士がいたのですが、私の宿に一晩泊まり、私の宝を盗んだうえに私の顔に傷をつけていきました。そのことはよく覚えています」と言った。

④この世界の人間は、旅人が一晩の仮の宿を求めて行くようなものである。皇帝アウグストゥスもアレクサンドロス大王も秦の始皇帝も醍醐天皇も、街道を通ったか通らなかったか見分けがつかないようなのである。しかしこの聖フランシスコや聖ドミニコなどは、神に向き合い、世の中を卑しく思い、財宝を捨てたことによって、世界に大きな傷をつけたのである。多くの人に世俗を捨てさせ、財産や所領を捨てさせたゆえに、世界の宝を盗んだと言うのである。だからこの二人のことは、世に隠れなきものである。たといどんな世界の人であっても、貴族や金持ちのことを知らないことはあっても、この世界で、神が聖フランシスコに偉大な名誉を与えられたということは知っていなければならないのである。

